

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書文学特殊研究 a	小友 聡	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 雅歌成立後のユダヤ教団の雅歌解釈について学ぶ。		
<到達目標> 雅歌が正典としてどのように読まれたか、その驚くべき解釈を知る。雅歌について高度な聖書学的知見を得る。		
<授業の概要> 雅歌のタルグム（アラム語訳）を英訳で読み、初期ユダヤ教の雅歌解釈についてじっくり学ぶ。		
<履修条件> 大学院前期課程との合同の授業である。旧約専攻外の学生にも開かれた授業だが、ヒブル語修得者。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 雅歌とはどういう書か 第3回 雅歌の字義的解釈について 第4回 雅歌の比喩的解釈について 第5回 雅歌のタルグムについて 第6回 雅歌 1 章 第7回 雅歌 2 章 第8回 雅歌 3 章 第9回 雅歌 4 章 第10回 「聖書協会共同訳」の雅歌について 第11回 雅歌 5 章 第12回 雅歌 6 章 第13回 雅歌 7 章 第14回 雅歌 8 章 第15回 総括		
<準備学習等の指示> 毎回、雅歌のタルグム英訳をきちんと読み、マソラ本文との読みの違いを把握すること。		
<テキスト> The Targum of Canticles (the Aramaic Bible), translated, with acritical introduction, apparatus, and notes by Philip S. Alexander, 2003. コピーを用いる。		
<参考書・参考資料等> その都度、指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 雅歌のタルグム英訳を講読するので、発表と授業への参加度で評価する。なお、後期課程学生にはレポート提出を求める。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書文学特殊研究 b	大住 雄一	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞	
＜授業のテーマ＞ 律法のテキストを手がかりに、聖書神学的にテキストを読むことの意味を考える。		
＜到達目標＞ 律法のテキストの特徴を身につける。後期学生は特別な課題をこなすようになる。		
＜授業の概要＞ 律法のテキストの特徴を講義する。		
＜履修条件＞ 大学院前期課程との合同の授業であるが、後期の学生には、それに相応しい発表とレポートを求める。		
＜授業計画＞ 第1回：律法とは何か 第2回：律法の文学的構造 第3回：律法の意味 第4回：律法と福音 第5回：アブラハムと律法 第6回：ダビデと霊の見分け 第7回：モーセと律法 第8回：ダビデの契約 第9回：ヤコブの律法 第10回：申命記の律法 第11回：祭司の律法 第12回：「モーセ五書」はなぜ「律法」か 第13回：ヤーウィストと律法 第14回：契約の書と律法 第15回：まとめ		
＜準備学習等の指示＞ 与えられた課題を発表する準備をしてくること。		
＜テキスト＞ 授業の中で指示する。		
＜参考書・参考資料等＞ 授業の中で指示する。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 課題の発表によって評価する。後期の学生には特別の課題を与える。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典特殊研究 a	本間 敏雄	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 創世記第二部、族長物語冒頭に位置するアブラハム物語の12, 13章をヒブル語原典において釈義しつつ、写本とマソラの専門的知識を修得し、ユダヤ教正典 (Miqra) としてのマソラ本文と諸現象の理解を深め、テキストの神学を探る。		
<到達目標> レニングラード写本 (Codex Leningradensis) を読み、写本本文の特質を把握。マソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、その釈義的意義とテキストの神学、背後のユダヤ教神学について洞察する。		
<授業の概要> 創世記12、13章のアブラム物語をレニングラード写本 (L) で読み、写本本文の特徴、個々のマソラの意味を釈義的に学ぶ。写本の歴史とマソラの全体像を学び、マソラ本文の諸現象を分析。テキストに表出しているユダヤ教神学 (マソラ本文神学) について考察する。旧約聖書原典釈義 I a と合同。		
<履修条件> ヒブル語基礎文法修得者		
<授業計画> 第1回 創世記12:1 アブラハム物語全体像、召命 第2回 12:2-3 召命と約束 第3回 12:4-6 アブラムの応答 第4回 12:7-9 顕現と祭壇 第5回 12:10-13 エジプトへ 第6回 12:14-17 サラの召し入れ 第7回 12:18-20 エジプト退去 第8回 五書研究史 (資料説) とアブラハム物語 第9回 マソラ本文形成の歴史 (1): 写本とマソラ 第10回 13:1-4 ベテルへの旅 第11回 13:5-7 一族の争い 第12回 13:8-9 別れの提案 第13回 13:10-13 ロトの選択 第14回 13:14-18 約束の更新 第15回 総括: 召命と応答		
<準備学習等の指示> 当該本文をレニングラード写本で読み特質を把握する。本文に関わる諸現象を「ヒブル語入門」10文の構造 (文章論) 以下特に12補説によって調査、考察する。当該本文のレニングラード写本及びBHSのマソラ (Mp,Mm) を調査し、その相違と本文学的、釈義的意味を把握する。専門資料を読んでおくと、諸現象を写本と本文形成の歴史において理解し、マソラ本文のユダヤ教神学的背景を考察する視座が養われる。		
<テキスト> レニングラード写本 (Codex Leningradensis) 写真版、Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS):Genesis、Biblia Hebraica Quinta(BHQ):Genesis、「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近／本間) (10.文の構造 (構文論)、12補説: 本文の諸現象 (補注一覧))。		
<参考書・参考資料等> 「旧約聖書の本文研究」(E.ヴェルトヴァイン 鍋谷／本間共訳)、「ヘブライ語聖書への手引き」(R.ウォンネベルガー 松田伊作訳)、A simplified guide to BHS(H.P.Rueger). G.E.Weil, Massorah Gedolah-iuxta Codicem Leningradensem B19a, 1971. C.D.Ginsburg, Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible, 1897/1966. A.Geiger, Urschrift und Uebersetzungen der Bibel in ihrer Abhaengigkeit von der innern Entwicklung des Judentums, 2 Aufl.1928. P.Kahle, The Cairo Geniza,2ed. 1959. 他諸文献、資料は順次提示。		
<学生に対する評価 (方法・基準)> 予習と課題発表、討議、レポート (本文 6000 字以上) の総合で評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典特殊研究 b	本間 敏雄	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 旧約聖書原典である写本とマソラ本文、特にマソラの専門的知識を修得し、アブラハム物語の14, 15章を釈義しつつ、ユダヤ教正典 (Miqra) としての写本文と諸現象の理解を深め、テキストの神学を探る。		
<到達目標> レニングラード写本 (Codex Leningradensis) を読み、写本本文の特質を把握。マソラ学者の仕事と本文の諸現象を認識し、その釈義的意義及びテキストの神学、背後のユダヤ教神学について洞察する。		
<授業の概要> 創世記14, 15章のアブラム物語をレニングラード写本 (L) で読み、写本本文の特徴、個々のマソラの意味を釈義的に学ぶ。マソラ本文の諸現象を分析し、テキストに表出しているユダヤ教神学 (マソラ本文神学) について事例的に考察する。旧約聖書原典釈義 I b と合同。		
<履修条件> ヒブル語文法修得者。		
<授業計画> 第1回 創世記14:1-4 王たちの戦い (1) 第2回 14:5-9 王たちの戦い (2) 第3回 14:10-12 ソドムのロト 第4回 14:13-16 ロトの救出 第5回 14:17-20 メルキゼデクの祝福 第6回 14:21-24 ソドムの王 第7回 総括:メルキゼデク/十分の一伝承 第8回 マソラ本文形成の歴史 (2):マソラ本文の諸現象 (ケレ、母音、アクセント等) 第9回 マソラ本文形成の歴史 (3):マソラ本文の神学 第10回 15:1-3 神の約束 第11回 15:4-6 アブラムの信仰 第12回 15:7-11 子孫と土地の約束 契約儀式 (1) 第13回 15:12-16 暗黒と幻 第14回 15:17-21 炉と松明 契約儀式 (2) 第15回 総括:信仰義認と契約神学		
<準備学習等の指示> 当該本文をレニングラード写本で読み特質を把握する。本文に関わる諸現象を「ヒブル語入門」10文の構造 (文章論) 以下特に12補説によって調査、考察する。当該本文のレニングラード写本及びBHSのマソラ (Mp,Mm) を調査し、その相違と本文学的、釈義的意味を把握する。専門資料を読んでおくと、諸現象を写本と本文形成の歴史において理解し、マソラ本文のユダヤ教神学的背景を考察する視座が養われる。		
<テキスト> レニングラード写本 (Codex Leningradensis) 写真版、Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS):Genesis、Biblia Hebraica Quinta(BHQ):Genesis、「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近/本間)(10.文の構造 (構文論)、12補説:本文の諸現象 (補注一覧))。		
<参考書・参考資料等> 「旧約聖書の本文研究」(E.ヴュルトヴァイン 鍋谷/本間共訳)、「ヘブライ語聖書への手引き」(R.ウォンネベルガー 松田伊作訳)、A simplified guide to BHS(H.P.Rueger). G.E.Weil, Massorah Gedolah-iuxta Codicem Leningradensem B19a, 1971. C.D.Ginsburg, Introduction to the Massoretico-Critical Edition of the Hebrew Bible, 1897/1966. A.Geiger, Urschrift und Uebersetzungen der Bibel in ihrer Abhaengigkeit von der innern Entwicklung des Judentums, 2 Aufl.1928. P.Kahle, The Cairo Geniza,2ed. 1959. 諸註解、文献は順次提示。		
<学生に対する評価 (方法・基準) > 予習と課題発表、討議、レポート (本文 6000 字以上) の総合で評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞通年で履修が望ましい。	
＜授業のテーマ＞旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。さらに、マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。		
＜到達目標＞①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。マソラテキストとタルグムや七十人訳等の古代訳との比較を行えるようになる。		
＜授業の概要＞聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（創世記31：47・エレミヤ10：11・エズラ4：8－24・5：1－17など）、アラム語文法を学ぶ。		
＜履修条件＞ヒブル語履修済みであること。また、七十人訳等の古代訳との比較も行うので、ギリシア語等の文法の基礎を身につけていることが望ましい。		
＜授業計画＞		
第1回：序 アラム語について、言語グループ、時代区分などを話す。		
第2回：創世記31：47を読みつつ、アラム語の名詞・形容詞を学ぶ。		
第3回：エレミヤ10：11を読みつつ、動詞のPeal形の完了・未完了を学ぶ。		
第4回：エズラ4：8－24の講読(1) 不規則変化の名詞について学ぶ。		
第5回：エズラ4：8－24の講読(2) 動詞のHapel形の完了を学ぶ。		
第6回：エズラ4：8－24の講読(3) 動詞のPeal形の分詞、Hitpeel形の完了・未完了を学ぶ。		
第7回：エズラ4：8－24の講読(4) 動詞のPael形の完了・未完了、Hapel形の未完了を学ぶ。		
第8回：エズラ4：8－24の講読(5) 動詞のHapel形の分詞を学ぶ。		
第9回：エズラ4：8－24の講読(6) 動詞のPael形・Hitpeel形・Hitpaal形の分詞を学ぶ。		
第10回：エズラ4：8－24の講読(7) 二根字動詞のPeal形と動詞の不定詞・命令を学ぶ。		
第11回：エズラ5：1－17の講読(1) 前置詞と代名詞語尾を学ぶ。		
第12回：エズラ5：1－17の講読(2) 二根字動詞のHapel形を学ぶ		
第13回：エズラ5：1－17の講読(3) 二根字動詞のHitpeel形を学ぶ。		
第14回：エズラ5：1－17の講読(4) Pê Yôd 動詞の変化を学ぶ。		
第15回：エズラ5：1－17の講読(5) Pê Nûn 動詞の変化を学ぶ。		
＜準備学習等の指示＞講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパルトゥスや七十人訳等の古代訳にも注意を払うこと。		
＜テキスト＞Biblia Hebraica Stuttgartensia； Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition		
＜参考書・参考資料等＞左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011； William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971； Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt：Wissenschaftliche Buchgesellschaft，1960； Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen：E. Pfeiffer, 1938； Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞予習・復習、積極的な授業参加の状況、聖書のアラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉	＜担当形態＞ 単独
後期・2単位	＜登録条件＞通年での履修が望ましい。	
＜授業のテーマ＞旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。さらに、マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。		
＜到達目標＞①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。マソラテキストとタルグムや七十人訳等の古代訳との比較を行えるようになる。		
＜授業の概要＞聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（ダニエル書）、アラム語文法の学びを継続する。さらに、エレミヤ書などのタルグムの講読もする。（箇所は未定。授業中に指示する。）		
＜履修条件＞ヒブル語履修済みであること。また、七十人訳等の古代訳との比較も行うので、ギリシア語等の文法の基礎を身につけていることが望ましい。		
＜授業計画＞		
第1回：ダニエル書の緒論的知識を確認し、前期の文法の復習をしつつ、ダニエル書の講読に備える。		
第2回：ダニエル書の講読(1) Pè´ālep 動詞の Peal 形を学ぶ。		
第3回：ダニエル書の講読(2) Pè´ālep 動詞の Hapel 形を学ぶ。		
第4回：ダニエル書の講読(3) 動詞の変化で字位転換が起こる場合について学ぶ。		
第5回：ダニエル書の講読(4) Lamed´ālep・Lamed Hê 動詞の変化を学ぶ。		
第6回：ダニエル書の講読(5) 二重´ayin 動詞の Peal 形を学ぶ。		
第7回：ダニエル書の講読(6) 二重´ayin 動詞の Hopal 形を学ぶ。		
第8回：ダニエル書の講読(7) 代名詞語尾付きの動詞の変化を学ぶ。		
第9回：ダニエル書の講読(8) 喉音を含む動詞について学ぶ。		
第10回：ダニエル書の講読(9) 特殊な変化をする動詞について学ぶ。		
第11回：エレミヤ書の緒論的知識とバビロニア方式の母音記号を確認し、タルグムの講読に備える。		
第12回：タルグムの講読(1) バビロニア方式の母音記号で読むことに慣れる。		
第13回：タルグムの講読(2) タルグムのアラム語の動詞の変化を学ぶ。		
第14回：タルグムの講読(3) アラム語文法を全体的に思い出しつつ読む。		
第15回：タルグムの講読(4) 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。		
＜準備学習等の指示＞講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパラートゥスや七十人訳等の古代訳にも注意を払うこと。		
＜テキスト＞Biblia Hebraica Stuttgartensia；The Pentateuch according to Targum Onkelos；The Former Prophets according to Targum Jonathan；The Latter Prophets according to Targum Jonathan；Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition		
＜参考書・参考資料等＞左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011；William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971；Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt：Wissenschaftliche Buchgesellschaft，1960；Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen：E. Pfeiffer, 1938；Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞予習・復習、積極的な授業参加の状況、タルグムのアラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書神学特殊研究 a	焼山 満里子	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> テサロニケの信徒への手紙一、二の釈義を通して初期キリスト教の形成、パウロ伝道、神学について学ぶ。		
<到達目標> パウロの真正書簡、第二書簡の違いをふまえてテサロニケ両書簡、パウロの伝道活動、神学を理解する。		
<授業の概要> テサロニケの信徒への手紙一、二の釈義。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 テサロニケ一：1-10 第3回 テサロニケ二：1-12 第4回 テサロニケ二：13-2：20 第5回 テサロニケ三：1-13 第6回 テサロニケ四：1-12 第7回 テサロニケ四：13-5-3 第8回 テサロニケ五：4-15 第9回 テサロニケ五：16-28 第10回 テサロニケ二1：1-12 第11回 テサロニケ二2：1-12 第12回 テサロニケ二2：13-3：5 第13回 テサロニケ二3：6-18 第14回 テサロニケ一、二の比較 終末論 第15回 テサロニケ一、二の比較 真正性		
<準備学習等の指示> 各回、聖書を私訳し G.フィー『新約聖書の釈義』および注解書に従って釈義して出席のこと。		
<テキスト> G.フィー『新約聖書の釈義』		
<参考書・参考資料等> 注解書を各自選んで一学期を通して読む。他は適宜紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の授業参加と私訳、期末レポートによって評価する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書神学特殊研究 b	焼山 満里子	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 前期に学んだテサロニケの終末論を他の終末論と比較し理解を深める。		
<到達目標> 新約聖書の思想について終末論をてがかりに理解する。		
<授業の概要> いくつかの研究書を比較検討する。		
<履修条件>		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 『パウロの中心思想』 第3回 『終末論の系譜』IX章 第4回 『終末論の系譜』VIII章 第5回 『古代都市のキリスト教』I章 第6回 『古代都市のキリスト教』II章 第7回 『古代都市のキリスト教』III章 第8回 『古代都市のキリスト教』IV章 第9回 『古代都市のキリスト教』V章 第10回 『古代都市のキリスト教』VI章 第11回 『キリスト教とローマ帝国』I章 第12回 『キリスト教とローマ帝国』II章 第13回 『キリスト教とローマ帝国』III章 第14回 総括1、終末論とは何か 第15回 総括2、初期キリスト教運動とは何か		
<準備学習等の指示> 毎回の課題図書を読み、発表担当の回にはプレゼンをしつつ理解を深める		
<テキスト> 適宜紹介する		
<参考書・参考資料等> 適宜紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）>毎回の授業参加、授業で扱うテキストのブックレポート、期末レポート。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典特殊研究 a	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>原則として通年（a, b）で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。	
<授業のテーマ> ヨハネによる福音書 13：31～16:06 までの原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、新約聖書学の基礎（研究史、釈義の方法論）を修得し、テキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。		
<履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。 第02回 ギリシャ語新約聖書本文批評の実際。 第03回 テキストの文学批評の実際。 第04回 テキストと歴史批評の実際。 II. 演習（参加者による釈義の発表とディスカッション）を中心に 第05回 ヨハネ13：31～38の原典釈義 第06回 ヨハネ14：01～07の原典釈義 第07回 ヨハネ14：08～14の原典釈義 第08回 ヨハネ14：15～21の原典釈義 第09回 ヨハネ14：22～26の原典釈義 第10回 ヨハネ14：27～31の原典釈義 第11回 ヨハネ15：01～08の原典釈義 第12回 ヨハネ15：09～17の原典釈義 第13回 ヨハネ15：18～27の原典釈義 第14回 ヨハネ16：01～06の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。		
<準備学習等の指示> クラスで取り上げる箇所のギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>		
<参考書・参考資料等> R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年 R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年 R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年 C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i> , 2003.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000 文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典特殊研究 b	遠藤 勝信	＜担当形態＞ 単独
後期・2単位	＜登録条件＞原則として通年（a, b）で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。	
＜授業のテーマ＞ ヨハネの黙示録 21：15～22：21、及び 01：01～02：07 までの原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
＜到達目標＞ 学生が、新約聖書学の基礎（研究史、釈義の方法論）を修得し、テキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。		
＜授業の概要＞ はじめに近年のヨハネ黙示録研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。		
＜履修条件＞ 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい。		
＜授業計画＞ I. 講義を中心に 第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に（その1）：黙示録の周辺、背景理解。 第03回 黙示録を読む前に（その2）：構造と構成、神学、他。 第04回 黙示録1～21章14節までを概観し、釈義の営みにおける課題と観点を確認する。 II. 演習（参加者による発表とディスカッション）を中心に 第05回 黙示録21：15～21の原典釈義 第06回 黙示録21：22～27の原典釈義 第07回 黙示録22：01～05の原典釈義 第08回 黙示録22：06～09の原典釈義 第09回 黙示録22：10～15の原典釈義 第10回 黙示録22：16～21の原典釈義 第11回 黙示録01：01～06の原典釈義 第12回 黙示録01：07～11の原典釈義 第13回 黙示録01：12～20の原典釈義 第14回 黙示録02：01～07の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。		
＜準備学習等の指示＞ クラスで取り上げる箇所のギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。		
＜テキスト＞ Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>		
＜参考書・参考資料等＞ 佐竹明著『ヨハネの黙示録』（上・下巻）2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997. S. Smalley, <i>The Revelation of John</i> (IVP), 2005. 他、クラスで随時紹介。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000 文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
聖書解釈学特殊研究 a	中野 実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>とくになし	
<授業のテーマ> 新約聖書をめぐる神学的諸問題		
<到達目標> 新約聖書をめぐる神学的諸問題についてより深く知り、自分自身の判断、理解を確立し、自らの研究に役立てられるようになる。		
<授業の概要> 担当者の書いた論文を分担しながら読み、また、担当者自身による解説をとおして、新約聖書をめぐる諸問題について学ぶ。		
<履修条件> 通年で履修することが好ましい。そうでない場合は、事前に担当者と相談すること。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 新約聖書神学の諸問題 導入的講義 第3回 福音書研究 論文「救いと贖きの間」を読む。 第4回 福音書研究 福音書とは何か？ 歴史、物語、信仰。 第5回 福音書研究の方法論。 歴史批評、物語批評。 第6回 史的イエス研究 チャールズワーズ『これだけは知っておきたい史的イエス』 第7回 史的イエス研究 論文「イエスとレプラの清め」を読む。 第8回 翻訳問題 論文『「ツァーラアト」』『レプラ』をどう翻訳するか』を読む。 第9回 史的イエス研究 「主のいのり」に関する論文を読む。 第10回 史的イエス研究はなぜ必要か？ 議論 第11回 旧約聖書と新約聖書 論文「小さな癒しの物語の中の大きな救いの物語」を読む。 第12回 旧約聖書と新約聖書 論文「正典批評 B 方法論の適用例」を読む。 第13回 新約聖書における旧約聖書の役割と意義 議論 第14回 史的イエス研究、福音書研究の諸問題のまとめ 第15回 前期のまとめと後期への方向付け		
<準備学習等の指示>自分の担当論文のみならず、課題となっている論文をしっかりと読む努力をし、新約聖書に関する理解を深める。		
<テキスト>旧・新約聖書、ギリシャ語新約聖書、および担当者の準備した論文コピー。		
<参考書・参考資料等>必要に応じてクラスで指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）>クラスへの積極的参加度（質問、コメントなど）、分担発表（40％）と（6000字以上の）期末レポート（60％）によって総合的に評価する。ただし、出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
聖書解釈学特殊研究 b	中野 実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>とくになし	
<授業のテーマ> 新約聖書をめぐる神学的諸問題		
<到達目標> 新約聖書をめぐる神学的諸問題についてより深く知り、自分自身の判断、理解を確立し、自らの研究に役立てられるようになる。		
<授業の概要> 担当者の書いた論文を分担しながら読み、また担当者自身の解説をとおして、新約聖書をめぐる諸問題について学ぶ。		
<履修条件> 通年で履修することが好ましい。そうでない場合は、事前に担当者と相談すること。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 論文「高いところからの力に覆われて」を読む。 第3回 新約聖書における聖霊論についての議論 第4回 論文「キリスト教の洗礼の起源に関する一考察」を読む。 第5回 新約聖書における洗礼とは？ 第6回 論文「聖餐の歴史的三つのルーツを探る」を読む。 第7回 新約聖書における聖餐とは？ 第8回 論文「見よ、私は最後のものを最初のもののように創る」を読む。 第9回 新約聖書における創造論と救済論の関係について 第10回 論文「マルティン・ヘンゲル『救済史』を読む」を読む。 第11回 論文「全信徒祭司性：その聖書的基礎づけの再検討」を読む。 第12回 論文「正典批評」を読む。 第13回 論文「聖書正典と信仰の規範：その相互作用について」 第14回 正典批評とは？議論 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 自分の分担論文のみならず、課題となっている論文をしっかりと読む努力をし、新約聖書に関する理解を深める。		
<テキスト> 旧・新約聖書、ギリシャ語新約聖書、および担当者の準備した論文コピー。		
<参考書・参考資料等> 必要に応じてクラスで指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> クラスへの積極的参加度、分担発表（40%）、および（6000字以上の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。ただし、出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。		

聖書神学専攻		
博士論文指導演習聖書神学 a	各指導教授	＜担当形態＞
前期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
＜到達目標＞ 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		

聖書神学専攻		
博士論文指導演習聖書神学 b	各指導教授	＜担当形態＞
後期・ 0 単位	＜登録条件＞博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
＜到達目標＞ 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		

組織神学専攻・組織神学関係		
教義学特殊研究 a	須田 拓	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞	
＜授業のテーマ＞ キリスト論の諸相を学ぶことを通して、教会が宣べ伝えてきた福音についての深い教義学的理解を持つことを目指す。		
＜到達目標＞ キリストとはどなたかという信仰の重要なテーマについて、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。		
＜授業の概要＞ キリスト論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべきキリスト論の姿を模索する。		
＜履修条件＞ 特になし		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーション 第2回 キリスト論の論点(1) 上からのキリスト論と下からのキリスト論 第3回 キリスト論の論点(2) 神性と人性の関係（アレキサンドリア型とアンティオケ型） 第4回 上からのキリスト論 カール・バルトの場合 第5回 下からのキリスト論 ヴォルフハルト・パネンベルクの場合とその変遷 第6回 上からのキリスト論と下からのキリスト論(1) コリン・ガントンの場合 第7回 上からのキリスト論と下からのキリスト論(2) エーミル・ブルンナーの場合 第8回 上からのキリスト論と下からのキリスト論(3) その他の神学者の場合 第9回 履修者による発表 第10回 神性と人性(1) カール・バルトの場合（アンヒュポスタシアとエンヒュポスタシア） 第11回 神性と人性(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第12回 神性と人性(3) イングランド・ピューリタンの神学者の場合 第13回 神性と人性(4) コリン・ガントンの場合 第14回 キリスト論に関するその他の論点について 第15回 履修者による発表とまとめ		
＜準備学習等の指示＞ 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく		
＜テキスト＞ 特になし		
＜参考書・参考資料等＞ 授業において、必要に応じて指示する		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する		

組織神学専攻・組織神学関係		
教義学特殊研究 b	須田 拓	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 終末論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。		
<到達目標> 終末論の重要なテーマについて、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。		
<授業の概要> 終末論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき終末論の姿を模索する。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 終末論の論点(1) 個人的終末論と宇宙的終末論 第3回 終末論の論点(2) 現在の終末論と将来的終末論 第4回 終末論の論点(3) 時間と永遠 第5回 個人的終末論と宇宙的終末論(1) ユルゲン・モルトマンの場合 第6回 個人的終末論と宇宙的終末論(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第7回 個人的終末論と宇宙的終末論(3) その他の神学者の場合 第8回 中間総括 第9回 将来的終末論の回復(1) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第10回 将来的終末論の回復(2) ユルゲン・モルトマンの場合 第11回 時間と永遠(1) カール・バルトの場合 第12回 時間と永遠(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第13回 時間と永遠(3) ユルゲン・モルトマンの場合 第14回 終末論に関するその他の論点について 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する		

組織神学専攻・組織神学関係		
キリスト教倫理学特殊研究 a キリスト教社会倫理特殊研究 a	神代 真砂実	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞ キリスト教倫理学特殊研究 b（キリスト教社会倫理特殊研究 b）との通年の履修が望ましい。	
＜授業のテーマ＞ 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』中の倫理学についての部分を学ぶことで、バルトの倫理思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。		
＜到達目標＞ ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、倫理学の特定の主題についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。		
＜授業の概要＞ バルトの『教会教義学』から創造論中の倫理学、特に 55 節（「生への自由」）に展開される生命および生活にかかわる議論を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
＜履修条件＞ 前期課程との合同（並行）授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーション 第2回 テキスト、3～23 頁（1. 生への畏敬①） 第3回 同、23～34 頁（同②） 第4回 同、34～47 頁（同③） 第5回 同、47～55 頁（同④） 第6回 同、55～70 頁（同⑤） 第7回 同、70～92 頁（同⑥） 第8回 同、92～107 頁（同⑦） 第9回 同、107～130 頁（同⑧） 第10回 同、130～143 頁（同⑨） 第11回 同、143～154 頁（同⑩） 第12回 同、155～175 頁（2. 生の保護①） 第13回 同、175～192 頁（同②） 第14回 同、192～212 頁（同③） 第15回 同、212～224 頁（同④）		
＜準備学習等の指示＞ 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席することはもちろんであるが、さらに、テキストの内容に関連する事柄について自分から積極的にリサーチし、考察し、問題点を整理しておくこと。		
＜テキスト＞ カール・バルト、『教会教義学・創造論Ⅳ／3 創造者なる神の戒め〈iii〉』、吉永正義訳（新教出版社、オンデマンド）。		
＜参考書・参考資料等＞ 授業の中で適宜、紹介するが、Geoffrey W. Bromiley, <i>An Introduction to the Theology of Karl Barth</i> 中の当該箇所についての記述には必ず目を通しておくこと。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 授業への参加度（議論におけるリーダーシップを含む）、小課題、および期末のレポート（本文 6,000 字以上）による。		

組織神学専攻・組織神学関係		
キリスト教倫理学特殊研究 b キリスト教社会倫理特殊研究 b	神代 真砂実	＜担当形態＞ 単独
後期・2単位	＜登録条件＞ キリスト教倫理学特殊研究 a（キリスト教社会倫理特殊研究 a）との通年の履修が望ましい。	
＜授業のテーマ＞ 前期と同じ。		
＜到達目標＞ 前期と同じ。		
＜授業の概要＞ 前期と同じ。		
＜履修条件＞ 前期と同じ。		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーションおよびテキスト、224～237 頁（2. 生の保護⑤） 第2回 テキスト、237～248 頁（同⑥） 第3回 同、248～263 頁（同⑦） 第4回 同、263～282 頁（同⑧） 第5回 同、282～303 頁（同⑨） 第6回 同、304～329 頁（3. 働く生活①） 第7回 同、329～348 頁（同②） 第8回 同、349～364 頁（同③） 第9回 同、364～380 頁（同④） 第10回 同、380～393 頁（同⑤） 第11回 同、393～414 頁（同⑥） 第12回 同、414～428 頁（同⑦） 第13回 同、428～450 頁（同⑧） 第14回 同、450～471 頁（同⑨） 第15回 同、471～489 頁（同⑩）、および一年の学びのまとめ		
＜準備学習等の指示＞ 前期と同じ。		
＜テキスト＞ 前期と同じ。		
＜参考書・参考資料等＞ 前期と同じ。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 前期と同じ。		

組織神学専攻・組織神学関係		
現代神学特殊研究 a	芳賀 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 通年で取ることが望ましい。	
<授業のテーマ> 教会論と終末論を教義学的に整理し、その理解を深める。		
<到達目標> 前期はE.ブルンナーの教会論と信仰論を顧み、それとの対論を試みる。		
<授業の概要> ブルンナーの教義学第三巻(上)を順番に読み、担当者の発表を踏まえて討論する。		
<履修条件> 博士課程後期に在籍している者。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション：ブルンナーのエクレシア論 第2回 第三部 第1章 教会と聖霊 第3回 第2章 エクレシアの基礎と本質 第4回 第3章 原始キリスト教のエクレシアとパウロ的なエクレシア理念 第5回 第4章 エクレシアから教会への発展 第6回 第5章 発展を遅延させた契機とエクレシア回復の試み 第7回 第6章 エクレシアの道具及び器としての教会 第8回 第7章 ヨーロッパにおける教会の危機 第9回 第8章 教会の新しい形態を求めて 第10回 第9章 使徒的信仰告白による教会の根本規定 第11回 第10章 信仰の前提としてのエクレシア 第12回 第11章 信仰と不信仰 第13回 第12章 聖書の証言による信仰 第14回 第13章 信仰の誤解 第15回 総括		
<準備学習等の指示> テキストを前もって読んでおくこと。		
<テキスト> E.ブルンナー『ブルンナー著作集第4巻 教義学Ⅲ上』近藤・大村訳、教文館、1998年		
<参考書・参考資料等> 特になし。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末に、自分の研究テーマと関わりを持たせた小論文を書いてもらう。		

組織神学専攻・組織神学関係		
現代神学特殊研究 b	芳賀 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 通年で取ることが望ましい。	
<授業のテーマ> 前期に続いて、教会論と終末論を教義学的に整理し、その理解を深める。		
<到達目標> 後期はE.ブルンナーの聖化論と終末論を顧み、それとの対論を試みる。		
<授業の概要> ブルンナーの教義学第三巻(下)を順番に読み、担当者の発表を踏まえて討論する。		
<履修条件> 博士課程後期に在籍している者。		
<授業計画> 第1回 第14章 信仰義認論 第2回 第15章 教会の信条 第3回 第16—18章 教理信仰と聖書信仰 第4回 第19—20章 再生と回心 第5回 第21章 聖化 第6回 第22—24章 愛の命令と律法、世にあるキリスト者、祈りの神学 第7回 第四部 第1章 希望としての信仰 第8回 同 第2章 不信仰からの異議 第9回 同 第3—4章 神の国と永遠の生命、歴史の意味と目標としての神の国 第10回 同 第5—6章 永遠と死 第11回 同 第7—8章 キリストのもとにあること、再臨 第12回 同 第9章 復活 第13回 同 第10章 万人の和解と世界審判 第14回 同 第11章 完成 第15回 総括		
<準備学習等の指示> テキストを前もって読んでおくこと。		
<テキスト> E.ブルンナー『ブルンナー著作集第5巻 教義学Ⅲ下』近藤・大村訳、教文館、1998年		
<参考書・参考資料等> 特になし。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末に、自分の研究テーマと関わりを持たせた小論文を書いてもらう。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
神学史特殊研究 a	棚村 重行	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 通年の履修が望ましい。	
<授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史―神学・信仰復興・教会形成」		
<到達目標> 履修者が、英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17 世紀～20 世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学にかんする第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深めることを目指す。以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。		
<授業の概要> 前期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を提起し、17～19 世紀前半（1650-1860）までの英米のピューリタニズム移植、第一次、第二次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について、講義と史料分析を行う。		
<履修条件> 現代・近代プロテスタント神学思想の基本的な知識、あるいは英米教会史・神学思想史などへのある程度の関心と素養が必要である。前期課程との並行事業でもあるので、後期課程の履修者は、十分発表前の準備をし、参加者の議論を補足したり、リードする予習準備をすることが望ましい。		
<授業計画> 第1回 コース紹介。導入講義：英米日の「福音主義の歴史」研究の必要性：「福音主義」の定義。 第2回 講義（一）：アメリカ教会史と神学思想史解釈：D. ボンヘッフアー、D. A. スウィーニー、佐藤敏夫他。 第3回 史料分析（一）：17～18 世紀「ピューリタン大覚醒」（T. フッカー）と英国メソジズム（ウェスレー） 第4回 講義（二）：18 世紀北米における「第一次大覚醒運動」（1730～1760）植民地時代の三大教派の出現 第5回 史料分析（二）：J. エドワーズ(1)：「原罪論」、「ニューイングランド信仰復興の忠実な報告」 第6回 史料分析（三）：J. エドワーズ(2)：「信仰復興についての幾つかの考察」 第7回 講義（三）：18 世紀北米のメソジズム神学、信仰復興、教会形成：「宗教箇条」、A. クラーク他 第8回 講義（四）：19 世紀前半の「第二次大覚醒運動」（1800～1830）開拓時代の三大教派成長 第9回 史料分析（四）：19 世紀前半の新派カルヴァン主義神学の誕生：N. W. テイラー他 第10回 史料分析（五）：C. G. フィニー(1)：回心についての説教、「組織神学」から抜粋テキスト 第11回 史料分析（六）：C. G. フィニー(2)：「宗教の復興とは何か？」 第12回 史料分析（七）：長老派内の新派カルヴァン主義：A. バーンズ 「救いの道」から植村正久へ 第13回 史料分析（八）：メソジストの神学、信仰復興、教会形成： フィニーから D. D. ウィードンへ 第14回 講義（五）：幕末開国期日本：改革派-長老派-会衆派型およびメソジスト型「二つの福音」問題 第15回 講義（六）：植村正久、本多庸一、新島襄他：福音主義神学、信仰復興、教会形成、まとめ。		
<準備学習等の指示> テキストの予習と復習が大切である。そのために、とくに予習に力を入れ、授業中の議論を準備すること。		
<テキスト> コピーで配布。		
<参考書・参考資料等> A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005 を購入することが望ましい。その他は、授業の中で、教員が追って指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 前期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成し、提出する。分量は 400 字詰め原稿用紙に換算して 25―30 枚以内。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
神学史特殊研究 b	棚村 重行	<担当形態> 単独
後期・2 単位	<登録条件> 通年で履修することが望ましい。	
<授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史―神学・信仰復興・教会形成」		
<到達目標> 英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17 世紀～20 世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学の第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深める以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。		
<授業の概要> 後期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を確立し、19 世紀後半～20 世紀後半（1865-2010）までの米日の第三次、第四次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について講義と史料分析を行う。		
<履修条件> 前期に同じ。		
<授業計画> 第 1 回 コースの紹介。講義（一）：「南北戦争以後の北米の社会と宗教の変貌」（T.L.スミス説の紹介） 第 2 回 史料分析（一）：19 世紀後半の「第三次大覚醒運動」（1870～1920）「都市の信仰復興」について 第 3 回 史料分析（二）：D.L. ムーディー(1)：ムーディーの諸説教にみる福音主義神学と教会形成の課題 第 4 回 史料分析（三）：D.L. ムーディー(2)：彼の信仰復興論「教会に行かぬ人に福音をどう届けるか？」 第 5 回 講義（二）：20 世紀初頭の日本の「大挙伝道」：本多庸一、植村正久他 第 6 回 講義（三）：20 世紀前半の第一次世界大戦後の北米の「近代主義」対「根本主義」論争、特に G.M. マースデンの所論に即して；北米における新たなペンテコステ派、「四重の福音」および高教会神学の出現 第 7 回 史料分析（四）：A.J. シンプソン：『四重の福音』；A.J. ゴードン『み霊の務め』 第 8 回 史料分析（五）：日本における神学の変貌：中田重治のホーリネス神学と逢坂元吉郎 の高教会神学 第 9 回 講義（四）：日米欧における「新正統主義神学」：H.R. ニーバーと熊野義孝の神学とその意義 第 1 0 回 講義（五）：20 世紀後半の「第四次大覚醒〔戦後信仰復興〕運動」（1950～1990?） 第 1 1 回 史料分析（六）：ビリー・グラハム(1)：略歴と神学諸テーマ（啓示、創造と墮罪、贖罪） 第 1 2 回 史料分析（七）：ビリー・グラハム(2)：諸テーマ（救済、教会、説教と聖礼典、終末論） 第 1 3 回 講義（六）：日本基督教団における「戦後信仰復興運動」の神学、信仰復興、教会形成の課題 第 1 4 回 講義（七）：1980 年代後の英米日の福音主義諸派の動向：北米の「宗教的右派」、「福音派」の動向 第 1 5 回 総合討論：通年の学びからみた「福音主義」とその歴史の総括。まとめ。		
<準備学習等の指示> 前期に同じ。		
<テキスト> コピーで配付。		
<参考書・参考資料等> A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005 を購入することが望ましい。その他は、授業の中で、教員が追って指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 後期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成せよ。分量は 400 字詰め原稿用紙に換算して 25－30 枚以内。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
宗教改革史特殊研究 a	関川 泰寛	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 宗教改革の大きな流れを考慮しつつ、ジュネーヴの改革者カルヴァンの生涯と神学を学ぶ。		
<到達目標> 一次史料を十分理解して、カルヴァンの思惟方法と神学の特徴を理解できるようにする。		
<授業の概要> 宗教改革者ジャン・カルヴァンの生涯と神学について学ぶ。特に『キリスト教綱要』Ⅰ～Ⅱの神論とキリスト論、聖霊論を読んで、カルヴァン神学の特色をつかむ。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回：宗教改革の時代概観：ルターからツヴィングリまで 第2回：宗教改革運動の諸相―再洗礼派や熱狂主義 第3回：カルヴァンの生涯（1）生誕から『キリスト教綱要』（初版）出版まで 第4回：カルヴァンの生涯（2）第一次ジュネーヴ滞在からストラスブルク時代 第5回：カルヴァンの生涯（3）ジュネーヴでの活動再開と改革運動の深化 第6回：カルヴァンの著作解題 第7回：カルヴァン神学の研究史概観 第8回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（1）神論Ⅰ 神認識 第9回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（2）神論Ⅱ 聖書と神認識 第10回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（3）キリスト論Ⅰ 律法と福音、キリストの三職 第11回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（4）キリスト論Ⅱ 贖罪 第12回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（5）聖霊論Ⅰ 信仰義認 第13回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（6）聖霊論Ⅱ 第14回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（7）聖霊論Ⅲ 第15回：全体に関わる質疑応答とディスカッション		
<準備学習等の指示> カルヴァンの生涯を復習しておくこと。		
<テキスト> カルヴァン『キリスト教綱要』1・2篇（渡辺信夫訳、改訳版、新教出版社）、D.K.Mckim, <i>The Cambridge Companion to John Calvin</i> , Cambridge University Press, Part Ⅰ～Ⅱを読むこと。		
<参考書・参考資料等> グレーフ『ジャン・カルヴァン：その働きと著作』（一麦出版社）、ニーゼル『カルヴァンの神学』他。教室で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 積極的授業態度と演習の発表の内容、小論文（D.K.Mckim, <i>The Cambridge Companion to John Calvin</i> , Cambridge University Press から主題を選ぶ）を総合して評価する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
宗教改革史特殊研究 b	関川 泰寛	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 宗教改革の大きな流れを考慮しつつ、ジュネーヴの改革者カルヴァンの生涯と神学を学ぶ。		
<到達目標> 一次史料を十分理解して、カルヴァンの思惟方法と神学の特徴を理解できるようにする。		
<授業の概要> 宗教改革者ジャン・カルヴァンの生涯と神学について学ぶ。特に『キリスト教綱要』Ⅲ～Ⅳの教会論に関わるカルヴァン神学の特色をつかむ。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回：カルヴァンと礼拝 第2回：ジュネーヴの教会の実像 ・カルヴァンにおける教会と国家 第3回：ローマ・カトリック教会との対立 第4回：再洗礼派と熱狂主義者との対立 第5回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（1）悔い改めについて 第6回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（2）信仰義認 第7回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（3）福音と律法 第8回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（4）キリスト教的な自由 第9回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（5）祈りと礼拝 第10回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（6）聖書 第11回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（7）選び 第12回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（8）真の教会と偽りの教会 第13回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（9）戒規 第14回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（10）洗礼 第15回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（11）聖餐		
<準備学習等の指示> カルヴァンの生涯を復習しておくこと。		
<テキスト> カルヴァン『キリスト教綱要』3・4 篇（渡辺信夫訳、改訳版、新教出版社）D.K.Mckim, <i>The Cambridge Companion to John Calvin</i> , Cambridge University Press, Part Ⅲ～Ⅳを読むこと。		
<参考書・参考資料等> グレーフ『ジャン・カルヴァン：その働きと著作』（一麦出版社）、ニーゼル『カルヴァンの神学』他。教室で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 積極的授業態度と演習の発表の内容、小論文（D.K.Mckim, <i>The Cambridge Companion to John Calvin</i> , Cambridge University Press から主題を選ぶ）を総合して評価する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特殊研究 a	朴 憲郁	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> ヨーロッパにおける宗教教育		
<到達目標> 今やキリスト教的伝統の自明性が崩れゆくヨーロッパ世界では、キリスト教の世俗化と他宗教信仰の移民の流入などで、宗教が流動化し多元化する社会を現出させている。しかし、将来の共同社会の形成に不可欠なく人間の尊厳、自由、民主主義、平和を子供たちの間で培う際に重要な役割を担う宗教教育が、正教分離原則の諸国でどのように実施されているのかを把握したい。		
<授業の概要> 最初に、近年の欧米諸国の宗教事情を全体的に把握する。その上で、いわゆる先進諸国における宗教教育がどのようになされているか、また何をを目指すのかを、諸資料を用いた共同作業（発表を含む）によって把握していく。		
<履修条件> 特にないが、授業の後半で英語文献を読み合わせ、必要に応じて発表するので、一定の英語力が求められる。		
<授業計画> 第1回 ヨーロッパの宗教教育を巡って（序論） 第2回 欧米諸国の宗教事情－カナダ－ 第3回 欧米諸国の宗教事情－ロシア－ 第4回 欧米諸国の宗教事情－スペイン－ 第5回 欧米諸国の宗教事情－スウェーデン－ 第6回 欧米諸国の宗教事情－イギリス－ 第7回 欧米諸国の宗教事情－ドイツ－ 第8回 欧米諸国の宗教事情－フランス－ 第9回 欧米諸国の宗教事情－イタリア－ 第10回 欧米諸国の宗教事情－アメリカ－ 第11回 ヨーロッパにおける宗教と教育－スイス－ 第12回 ヨーロッパにおける宗教と教育－イギリス－ 第13回 ヨーロッパにおける宗教と教育－ドイツ－ 第14回 ヨーロッパにおける宗教と教育－オランダ－ 第15回 ヨーロッパにおける宗教と教育－フィンランド－ 宗教教育学的総括		
<準備学習等の指示> 次週の授業範囲の関連資料を、各自前もって読んでおくこと。随時、担当箇所を発表していただく。		
<テキスト> 1. 文化庁、『海外の宗教事情に関する調査報告書』、平成20年版／平成24年版、 2. One Blog by Peter Schreiner, Religion and Education in Europa, 2013~2014. 3. Peter Schreiner, „Religious Education in the European Context”, Hungarian Educational Research Journal 三つのテキストは担当教師が用意する。		
<参考書・参考資料等> 1. 善家幸敏、『国家と宗教』－政教関係を中心として－、成文堂、平成5年(1993年) 2. Peter Schreiner (ed.), “Religious Education in Europe, Comenius Institute, Münster 2000.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。		

組織神学専攻		
博士論文指導演習組織神学 a	各指導教授	＜担当形態＞
前期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習組織神学 b と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。		
＜到達目標＞ 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、実際に博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞ 小まめに指導教授と面談し、アドヴァイスを受けるようにする。		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		

組織神学専攻		
博士論文指導演習組織神学 b	各指導教授	＜担当形態＞
後期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 設定したテーマのもとで、さらに研究を深め、論文を執筆する。		
＜到達目標＞ 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		